

ウズベキスタン・コリョ・サラムの現況と直接的につながるのかどうか、疑問が残ってしまうのである。証言や回想を主要なデータとする限り、証言者の社会的・歴史的背景に関する情報は、それらを判断し、文脈化するにあたって不可欠な要素である。こうした情報が大きく抜け落ちている点も、本書の学術的価値を下げていることは否めない。

コリョ・サラムにとって、移住を繰り返しながら、居住国にかかわらず維持しようとしてきた「伝統」がある反面、彼らがおかれた社会的・生態的・政治的環境との相互作用を通じて変容し、新たに築かれつつある側面もあるだろうことは、想像に難くない。「コリョ・サラムを居住国別に捉える」と一言でいっても、それがどのような手法によって可能となるのかは、引き続き考えていかなければならない、コリョ・サラム研究にとっての大きな課題のひとつである。

Ronald A. Messier and James A. Miller.
The Last Civilized Place: Sijilmasa and Its Saharan Destiny. Austin: The University of Texas Press, 2015, xiv+280 p.

平山草太*

「スィジルマーサへようこそ」という一文から始まる本書は、「黄金の都市」として知られる北アフリカ・スィジルマーサの町において、1980年代終わりから90年代にかけて

おこなわれた領域横断的調査の総括となる著作である。スィジルマーサは現在のモロッコ南東部、サハラ砂漠の縁辺にかつて存在し、この地理的条件を一因として、サハラ交易における要衝となっていたオアシス都市である。私はイブン・バットゥータのアトラス山脈越えそして西アフリカへの旅に関連して、スィジルマーサやその他モロッコ南東部の都市についての研究を調べていくうち、本書に出会った。著者のひとりである歴史学者ロナルド・メシエは、1970年代から80年代にかけて、スィジルマーサでかつて打造された古銭に関する研究を発表したのち、1987年からスィジルマーサにおける考古学を中心とした領域横断的調査プロジェクト、MAPS (*Moroccan-American Project at Sijilmasa*) の立ち上げに中心メンバーとして関わった。本書のもうひとりの著者であるジェームズ・ミラーは、MAPS立ち上げと同時期にモロッコで調査をおこなっていたつながりで、のちにMAPSに加わった地理学者である。

本書のタイトル、「最後の文明の地 (*The Last Civilized Place*)」は、11世紀のアンダルスで活動した学者であるバクリー (*Abū Ubayd al-Bakrī*, d. 1094?) による、「スィジルマーサは砂漠の入り口にあって、その西にも南にも人の住むところは知られていない¹⁾」という趣旨の記述を下敷きにしている。このような描写からもわかるように、スィジルマーサはサハラ砂漠の玄関口であったとさ

1) 原文は以下のとおり。 wa madīna sijilmāsa fī awwal al-ṣaḥrā' lā yu'rafu fī gharbīy-hā wa lā fī qiblīy-hā 'umrān [al-Bakrī 1992: 836].

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

れる。しかしその繁栄ぶりは広く知られる一方で、史料制約から、これまでスィジルマーサの実態を明らかにする研究はほとんど現れなかった。MAPS とその集大成である本書は、そうした空白を埋め、発掘調査を含む長年の実地調査の成果に基づいて、スィジルマーサのかつての姿を甦らせようと試みた野心的研究である。また、さまざまな学問領域を横断した方法や、現地住民との共同生活のなかでの気づき、そしてフィールドワークの過程にヒントを見出して進められる調査によって、スィジルマーサという都市あるいは周辺地域の実態がその建設前夜から現在そして未来に至るひとつのプロセスとして描き出される。このように、現在のスィジルマーサのありようを、確かな歴史性をもったものとして立ち現れさせた本書の方法は、ひとつの地域研究のありかたとして取り上げるに値するものであるといえる。以下に内容を章ごとに紹介していく。

スィジルマーサの姿を生き生きと描き出そうというコンセプトが、早速いくらか詩的に過ぎるかたちで表面化しているのがプロローグである。そこでは西暦 14 世紀の大旅行家、イブン・バットゥータの視点から、当時のスィジルマーサの様子が語られる。空想的描写の連続に、辟易してしまう向きもあるかもしれない。だがここは寛容に、MAPS による研究の成果を楽しむつもりで読み進めるべきだろう。

第 1 章では、スィジルマーサの歴史を概説するところから始まり、続いて本書が採用する種々の調査方法（発掘、古銭分析、聞き

取り、リモートセンシング等）についての説明が提示される。また従来のイスラーム都市研究を概観・整理したうえで、発掘調査の成果に基づく実証的な研究が、イスラーム都市研究の今後の展開において重要であることが主張される。

続く第 2 章では、スィジルマーサを含むターフィラルト盆地について、地質学的な歴史から始まって現在に至るまでの、気候や地形の説明がなされる。興味深いのは、ターフィラルト盆地を流れるズィーズ川上流で 1970 年代にダム建設がおこなわれたことにより、以降のターフィラルト盆地において水不足やナツメヤシの病気の蔓延が深刻化しているという事実である。この事実から、スィジルマーサを含むターフィラルト盆地の歴史が、現在に至るまで水源管理の問題と不可分であることが示唆される。並んで注目されるのは、用水路としてのズィーズ川建設というテーマである。現在ターフィラルト盆地の中心を貫くズィーズ川は、用水路として人工的に建設されたものであり、その建設時期はムラービト朝支配期にさかのぼるのではないかというのが著者の主張だ。²⁾ この主張は著者の描くスィジルマーサ像にとって極めて重要な部分をなすと考えられるが、一方で議論を呼ぶものでもある。この点についてはの

2) ムラービト朝時代と確言しているわけではないが、用水路建設をムラービト朝時代のサハラ交易の発展に結びつけている (p. 51, p. 61)。またこの用水路としてのズィーズ川というアイデアは、MAPS のオリジナルな発見ではない [Capel 2016]。とはいえ、発掘調査とリモートセンシングによってこれを確認したという点で MAPS の功績は評価されよう。

ちに触れることにする。

第3章からは、調査の成果が詳細に示され、スイジルマーサの実態が明らかにされていく。まず最初にスイジルマーサの地がかつてはベルベルの宿营地であったということ、そしてハワーリジュ派ムスリム³⁾によって西暦8世紀半ばにスイジルマーサ建設がなされたこと、さらにその当時の町中心部の様子が発掘調査の結果から実証されていく。続く箇所では、古銭の検討によって、スイジルマーサの支配をめぐるファーティマ朝とアンダルスのウマイヤ朝との争いの経緯についても説明される。そして最終的にスイジルマーサを支配したザナータ系ベルベルの圧政を受けて、ムラービト運動を率いるイブン・ヤーシーンへの救援要請が住民によってなされたという見解が示される。

第4章は、ムラービト朝、ムワッヒド朝、マリーン朝という3つの帝国の支配期についての章である。まずはムラービト運動の武力征服活動がスイジルマーサに及んで以降にスイジルマーサの町に起こった変化が説明される。なかでも注目されるのは、ベン・アクラ市場の発見だろう。スイジルマーサ郊外に存在したベン・アクラ市場は、巨大なキャラバンを収容する設備を備え、大規模化したサハラ交易を支える施設であったと説明される。そのうえで、金交易を中心としたスイジルマーサをとりまく商業ネットワークの説明

がなされていくが、特に古銭の分析を通じてなされる地中海周辺地域の政治・経済史的記述は、著者のこれまでの研究関心を強く示すものとなっている。またこの章で提示される発掘調査の成果のうち、ムワッヒド朝によるスイジルマーサ征服後に大モスクの改築・拡張がなされたという事実の発見は、スイジルマーサ中心地にあった大モスクの変容過程を明らかにするうえで非常に重要なものである。

第5章では、スイジルマーサは西暦14世紀末期に事実上崩壊したという、これまで一般的だった見解が反証される。この見解はレオ・アフリカヌスによる西暦16世紀初頭の記述とアラビア語史料の不在に基づくものであるが、発掘調査の進展により、西暦15世紀以降もスイジルマーサ中心部が崩壊せずに存在し続けていたばかりか、大モスクの改築・拡張や公衆浴場の新設といったことまでおこなわれていたことが明らかになる。さらに、サアド朝時代からその後の戦乱期に至るまで、スイジルマーサが政治・経済の表舞台にあり続けていたことも説明される。

第6章からは現在に続くアラウィー朝時代についての記述が始まるが、ここからは先行研究に基づいたモロッコ史の概説的な説明が多くなっていく。しかし同時に、かつて記録された古老の証言に基づく発掘調査により、西暦17世紀から20世紀までのモロッコ周辺の政治・経済的動きのなかに、スイジルマーサの変容が位置づけられていく。著者の見解によれば、スイジルマーサはモロッコ統治の要かつアラウィー朝発祥の地として一定の関心を集め続けつつも、18世紀末頃か

3) 本文中ではハワーリジュ派のなかでも特に「スフリ派」と特定されているが (pp. 71-73), Love [2010] が指摘したように、それを根拠づけることは難しい。

ら行政の中心が東方のリッサニ (*Rissani*) へと移っていき、大モスクを含む旧市街地は徐々に放棄されていったようである。さらにフランスの進出に伴うエルフード (*Erfoud*, リッサニ北方約 15 km に位置する町) の発展により、経済的な中心地はさらにリッサニからエルフードに移転していった。まとめると、スイジルマーサが歴史の表舞台から姿を消したのは、19 世紀から 20 世紀にかけてであるということになる。

第 7 章では、これまでの調査結果が、先行研究によるイスラーム都市のモデルに照らし合わせながら整理・分析されていく。具体的には、ファーティマ朝あるいはムラービト朝による支配以降、それまで町の中心部に開かれたかたちで存在していた政庁 (*Dār al-Imāra*) が町の北端を占める城塞に移動したことや、公的空間と私的空間の区別がはっきりしていたことなど、さまざまな発掘調査の成果が従来のイスラーム都市のモデルを裏付け、あるいは逆にそのモデルに裏付けられるかたちで提示される。同時にスイジルマーサの建設から放棄に至るまでの変容を時系列に沿って実証的に描いたことで、まさに現在に至るまで変化し続けるプロセスそのものとしてのスイジルマーサ像が明らかになったと著者は主張する。

終章となる第 8 章は、MAPS 終了後、著者が 2011 年にスイジルマーサを再訪した際の出来事を回想したものである。ここでは、いまなお変化し続けるスイジルマーサの様子がやや悲観的に記述される一方で、スイジルマーサ遺跡の発掘や保存について進展がみ

られることも示されている。

以上に紹介したように、本書をその集大成とする MAPS は、スイジルマーサを伝説上の黄金都市ではなく、現実の世界に存在した都市として具体化することに成功した。このことは著者も主張するように考古学的調査に基づくところが大きい。その一方で無視できないのは、そうした調査成果の解釈に、本書全体を通じて中世アラビア語史料の恣意的な利用という問題がつきまとっていることだ。その問題が顕著に現れている例として、先述したズィーズ用水路建設の時期をめぐる箇所がある。ここで著者はムラービト朝期の建設を示唆しているのだが、これは根拠を欠いた憶測に過ぎず、また本書に先行する MAPS 関係の論文 [Lightfoot and Miller 1996] では、先に紹介したバクリーによる記述の恣意的な解釈に基づいて、用水路建設時期をムラービト朝期以降に措定している。このズィーズ用水路問題は、スイジルマーサの町の変容に多大な影響を与えた重大なテーマであるがゆえに、MAPS の一員でもある Capel [2016] によって、地質学的知見を中世アラビア語史料の再解釈で補強するという方法ですでに徹底的な批判がなされている。しかし、史料解釈の相違に踏み込んだ時点で、カペルも本書の著者らと同様の問題に直面することになってはいないだろうか。そもそもスイジルマーサに言及するアラビア語史料の記述は、情報源の不明な伝聞情報がほとんどで、曖昧な記述も多い。むしろそうした記述の性格ゆえに、MAPS の調査に至るまでスイジルマーサは半ば伝説的な都市という存在に

留まり続けていたのである。したがって、具体的なテキストの解釈をあれこれ議論するより先に、まずそれら史料を考古学的・地質学的調査の成果に対してどのように位置づけかつ扱うのかという問題について議論がなされるべきではないだろうか。ズィーズ用水路の問題に限らず、本書は全体的に文字資料の位置づけが曖昧なままに、都合よくそれらを解釈・利用しているという印象がぬぐえない。

以上のような問題はあるものの、バクリーヤイブン・バトゥータの記述を通じてスィジルマーサを知り、その過去の栄華にある種の憧れを抱いていた私のような読者にとっては、本書がまさに念願の著作であったことはいままでもない。実際、先述したカペルや近年発掘調査を開始したフランスの研究チーム(p. 196)など、スィジルマーサの魅力に引き寄せられる者は後を絶たない。本書がその新たな可能性を切り開いたスィジルマーサ研究の、さらなる発展に期待したい。

引用文献

- al-Bakrī, Abū 'Ubayd. 1992. *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*. 2 vols., ed. A. P. Van Leeuwen and A. Ferre. Tūnis: Dār al-'Arabīya lil-Kitāb.
- Capel, C. 2016. Une grande hydraulique saharienne à l'époque médiévale: L'oued Ziz et Sijilmassa (Maroc), *Mélanges de la Casa de Valázquez* 46(1): 139-165.
- Lightfoot, D. R. and Miller, J. A. 1996. Sijilmassa: The Rise and Fall of a Walled Oasis in Medieval Morocco, *Annals of the Association of American Geographers* 86(1): 78-101.
- Love, P. M. 2010. The Sufiris of Sijilmasa: Toward a History of the Midrarids, *The Journal of North African Studies* 15(2): 173-188.

佐藤奈穂. 『カンボジア農村に暮らすメマーイ (寡婦たち) — 貧困に陥らない社会の仕組み』 京都大学学術出版会, 2017年, 260 p.

初鹿野直美*

本書は、「貧困」「社会的弱者」の代表的な事例ととらえられがちなカンボジアのメマーイ (夫を亡くした女性, いわゆる寡婦) を取り巻く環境を、「寡婦は貧困であるはずだ」という一般的な認識から一步身をひいたところから考察し、カンボジアの農村の柔らかな家族のありようが、メマーイがより貧しい状況に陥るリスクを最小化する方向に働いている実態を描き出す。寡婦たちの日常を資産・所得・ケアの3点から分析することで、女性・寡婦が資産や所得獲得において必ずしも不利な状況に置かれぬルールがあること、親やキョウダイ (兄弟姉妹) を中心とした親族ネットワークによる互助・支援が機能し、世帯を超えた支えあいが可能となっていること、これらによってさまざまなリスクへの対応が可能となっていることを明らかにする。

本書の構成は以下のとおりである。

- 序 アジアの豊かさを想う—夫を亡くしたカンボジア女性たち「メマーイ」の実態
- 第1章 夫を亡くした女性たちは貧困か?
- 第2章 カンボジアの社会・経済と調査村の概要
- 第3章 資産所有と相続による資産の獲得

* 日本貿易振興機構アジア経済研究所地域研究センター